○議長（稲葉昭宏君）　休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後　１時４５分）

◇　渡　辺　文　彦　君

○議長（稲葉昭宏君）　一般質問を続けます。

通告順位４番、渡辺文彦君。

（２番　渡辺文彦君　登壇）

○２番（渡辺文彦君）　通告に従いまして、壇上より一般質問をさせていただきます。

今回の議会において私は２点の点において質問をいたします。

１点目は、農業振興策と鳥獣被害についてであります。当町においても少子高齢化が進む中、農業の後継者が激減し、同時に耕作者自身の高齢化が進み、平均年齢70歳を超えるような状況が生まれ、耕作面積は減り耕作放棄地の増加も一因となっています。一方で、鳥獣による被害が拡大し、耕作放棄地に拍車をかけております。

この度、この４月に地方創生に関する総合戦略が策定され、人口減少の抑制を図りつつ人口減少社会への適応を模索する方向性が示されました。この戦略の中で謳う持続可能な地域社会を確立するために農業をどのように位置づけるべきなのか、行政に問いたいと思います。

その際、鳥獣被害対策も同時に考えていかなければ農業そのものが立ち行かない状況にあるのではないかと考えております。

２点目は、「日本で最も美しい村」連合に加入しての目指す方向性についてであります。当町は、平成25年、石部の棚田、なまこ壁の建造物、塩漬けの桜葉を地域資源として連合に加入しました。そして、この10月にはフェスティバルを開催することになっております。フェスティバルに向かって町民の意識がいま共有されていないような状況にあるのではないかと感じますので、改めて町民の方々にこの連合に参加する意味をどうして理解してもらうのか、行政の方に問いたいと思います。

また、地域資源として掲げられた３つの資源が地域の活性化にとってどうあるべきか、行政はどのように関わるべきか、その辺についてもお尋ねしたいと思います。

私の壇上からの質問はこれにて終わります。

（町長　齋藤文彦君　登壇）

○町長（齋藤文彦君）　渡辺文彦君の一般質問にお答えします。

１．農業振興策と鳥獣被害対策について。①「人口減対策の一環として農業振興をどのように捉えているか。また、どうあるべきかと考えているか」についてです。

人口減、特に少子高齢化問題は日本全体の個々の意識、社会保障制度の弱体化、不安定な経済など様々な要因が絡み合って加速していくもので、農業が盛んになれば必ずしも人口減が防げるものではありません。

しかしながら、高齢になっても農業に携わることで健康を維持しながら、一定の収入がある状態が長く続けば、それも人口減対策の一つかと考えていますが、最も重要で効果的なのは青年就農給付金制度の活用や農地集積化と思いますので、農業委員や農地利用推進委員と協力しながら対応していきたいと思います。

なお、過疎地域等自立支援推進事業費を６月議会で予算計上いたしましたが、若い方や生産意欲のある方に桜葉生産に取り組んでいただく基礎を構築し、高齢の方には効率の良いまるけ作業をしていただき全体で収入が確保できるイメージを組んで事業を実施してまいります。

②「農業委員会制度の変更に伴い、農地利用最適化推進委員を配置し、農地の集積を軸とした農地の利活用のあり方が問われているが、当町における方向性はどうあるべきと考えるか」についてです。

ご承知のように、農地利用最適化推進委員制度は遊休農地対策や担い手への農地集積、新規参入の促進が主な目的で、推進委員はこの目的を達成するために農業者の話し合いの場づくりや、個別訪問や調査により担い手に対する農地の斡旋などを行っていただくことになります。

新しい制度のため、全国どの市町村も今後どのように推進していくか手探り状態ですが、当面の間は毎月の農業委員会終了後、農業委員との合同研修会に出席いただき、情報交換や農業に関する検討をしてゆく中で町、農業委員会、推進委員で未来のあるべき姿を見据えながら方向性を定めてまいりますので、しばらく時間をいただきたいと思います。

③「農地の活用を進め、農業の振興を図ることが求められる状況下、鳥獣被害が多発し、農地の荒廃を招き、農業者の生産意欲の低下を助長している現状があるが、この問題にいかに対応するのか、その対策プランを問う」について

鳥獣被害対策については藤井議員の質問にもお答えいたしましたが、耕作者を対象に県が発行した「鳥獣被害対策の進め方」というマニュアルの配布や、集落全体で対応することで効果

が上がることもありますので、研修会等の開催を考えています。

また、一つのアイディアとして、現在は個々に電柵等を設置していますが、農地の集積化を進め、その一帯を電柵等で囲うことや、地区ごとの一斉捕獲などが考えられますが、どちらにしても防護と捕獲をバランスよく実施することが重要となります。

鳥獣被害は全国的な課題になっていますので、他地区で効果があった方法を柔軟に取り入れていきたいと考えております。そのような情報があればお教えいただきたいと思います。

２．「日本で最も美しい村」連合加入で目指す方向性について。①『「日本で最も美しい村」連合に加入した動機が町民に広く共有されていないように感じるが、その状況をいかに捉えているか。また、その理念、動機の実現のためにどうあるべきと考えているか』についてです。

町は、昭和53年度から「花とロマンのふる里づくり」をシンボルテーマに、豊かな自然や歴史など地域の特性を生かした、個性的で潤いのあるまちづくり、住んでいる人が誇りに思えるまちづくりを進めてまいりました。

「日本で最も美しい村」連合は、景観や環境、文化などの地域資源を守り、住民が自らの地域に誇りと愛着を持ち、主体的にまちづくり活動を展開することで地域の活性化を図ることを目的として活動している団体であり、連合のまちづくりが、まさにこれまで松崎町が進めてきたまちづくりそのものであり、互いに切磋琢磨したいとの思いから、加盟申請を行い、平成25年度に加盟を認められたものでございます。

まちづくりを進めていくためには、住民の皆さまがまちづくりに対する関心を高め、世代・業種を超えた住民のつながりを強化し、住民一人ひとりが自分の役割を認識し、責任を持って主体的に行動するとともに、行政と協働で取り組んでいくことが必要となります。

これまでも、広報や各種お知らせ、町の会議や各種団体開催の会議等で住民・地域の役割についてお伝えしているところあり、また、「松崎町まちづくりやろうじゃ協議会」の皆さまにも地域の牽引役として、まちづくりの考え方を浸透していただいているところでございます。

今後も、住民の皆さまとの意識の共有を図るため、今まで以上にさまざまな機会を捉えてまちづくりの考え方を伝えてまいりますので、議員におかれましても「日本で最も美しい村」連合のまちづくりにつきまして、これまで以上に住民の皆さまにご説明くださいますようよろしくお願いいたします。

②「10月にフェスティバルが開催されるが町全体でこの催しを盛り上げる機運が弱いように思えるが、このフェスティバルに期待するものはなにか」です。

10月６日から８日にかけ当町で開催される「日本で最も美しい村」連合フェスティバル2016ｉｎまつざきにつきましては、現在、町、議会、商工会、観光協会など各種団体からなる実行委員会や運営委員会、役場内の担当者会議で実施内容を協議しております。

また、委員以外の団体の皆さまにもご協力をいただき、松崎らしいおもてなしでお迎えしたいと準備を進めております。

これまでもフェスティバル開催につきましては、広報や記念物産展を通じてＰＲしてまいりました。なかなか、町民の皆さま全てがフェスティバルに直接的に関わるということは難しいと思いますが、町内一斉清掃により環境美化を図ることやあいさつなど心温まるおもてなしでお迎えできることはあると思いますので、協力をお願いしてまいりたいと考えております。

フェスティバルでは、まちづくりに積極的に取り組んでいる町、村、地域が松崎町に一堂に会することから、相互の取り組みや経験を共有する場や交流の場にするとともに、松崎町のまちづくりを全国にＰＲしてまいりたいと考えております。

また、住民の皆さまには、フェスティバルを契機に地域資源の素晴らしさを再認識していただき、誇りと愛着を持ってまちづくりに関わっていただきたいと思っております。

以上でございます。

○２番（渡辺文彦君）　これより一問一答形式でお願いいたします。

○議長（稲葉昭宏君）　許可します。

○２番（渡辺文彦君）　１点目から伺いたいんですけれども、この１点目について３つに分けていますけれども、この３つは相互に絡み合っていますので、同時的にお話を伺うような形になるかと思いますけれども、よろしくお願いいたします。

基本的にこの問題を取り上げている理論は先ほども申し上げましたけれども、これから町がどんどん少子化して人口が減っていく中で、農業をどのような位置づけで捉えるべきかということがやっぱり今回の質問の焦点にあるわけです。農業が活性化することによって人口が増えることにはならないんじゃないかみたいな答弁がいま若干あったような気がするんですけれども、それはそれでいいんですけれども・・、よくはないですね、やっぱり。ただ、僕がここにこだわる理由は、町が・・、観光も大切な産業なんですけれども、それに代って新しい就労の場を見いだす場がどこにあるかということですね。そのことを考えた時に、やっぱり農業というのは考えざるを得ないんじゃないかと、そういう観点からいつもこのことにこだわっているわけです。

それで、とりあえず、話をしやすくするために一つのストーリーの中で考えてみたいと思います。

いま町に新規就農者が、就農したいという方が来られて、役場の窓口に来て、「農業をやりたいんだけれど、どこか土地がないですか」と尋ねたとします。そうしたら、まず課長、どういうふうな応対をしますか。課長、お願いいたします。

○産業建設課長（高木和彦君）　まとまった大きな土地はありませんけれども、例えば、１反ですとか２反、それが何か所かにありますので、そういう形でのご紹介というのはしております。

○２番（渡辺文彦君）　おそらくいま課長が言われたように、とりあえず町は、耕作放棄地なり貸したい土地は把握していますから、これを見ていただければ、ここにこんな土地がありますよ。ここでよかったら使っていただきたいというようなご紹介をするんじゃないかと思います。

その時に、その土地が仮に１反２反であって、本人が仮に２反を求めていた場合、たまたま自分が希望していた土地が１反だった場合、その１反は確保できるけれど、あと１反がどこか飛び地であったと・・、それに対して、新規就農者は対応できますか。課長。

○産業建設課長（高木和彦君）　そのために今度農地の集積化とか、いろいろありまして、農地利用最適化推進委員というのを新たに設置して、そのあいだに入っていただいて、耕作をしていない方と新規、求めている方の間に入るというのをその委員さんの機能としてやっていただく形になっています。

○２番（渡辺文彦君）　僕の質問の②の中にその最適化推進委員の話が入っているわけですけれども、当然そういう方がおそらく媒介していかないと農地の利用は・・、仮に地域で、この間・・、例に挙げた方が２反欲しかった場合、確保できないと思うんですね。その時に、じゃあ、仮にそれで農地がなんとか確保できたと・・、その確保した土地が・・、その方は田んぼじゃなくて、水田じゃなくて、野菜を作りたいんだと・・、僕は野菜を作りたいんだけれど、周りは全部水田だと、これに対してどう対応しますか。

○産業建設課長（高木和彦君）　その時は、当然野菜を作りたいか、水田を作りたいかによって紹介する土地も変わってきます。

○２番（渡辺文彦君）　そうなった時に、じゃあ、町がそれだけ紹介できる土地を計画的に把握しているかということですね、問題は。最適化委員がその土地の利用状況を本当に正確に

把握していなければ、紹介できないわけですよね。最適化推進委員は、その状況を把握していますか。

○産業建設課長（高木和彦君）　この最適化委員の制度は、今年の４月になったばかりで、その委員の方も大変失礼ですけれども、十分な知識とか情報というのはないと思います。それにつきましては、私どもでこの間も話し合いを持ちましたけれども、その委員さんの方にどこにどういう土地がある。そういう情報は流して、その中で間に入っていただく形で考えています。

○２番（渡辺文彦君）　一応、最適化推進委員の話は始まったばかりでしょうから、まだまだ難しいでしょうけれど。ただ、この問題は最適化推進委員があったから初めて話をすることではないでしょうから、もう元々町は新規就農を何とか進めようということで今まで対応してきているはずです。だとしたらば、それに対して今、仮に町に誰かが来た時に、この土地をこんな形で・・、希望を聞いて、こんな形ならここがいいですよとかとある程度の情報把握をしなければ、本来はおかしいはずなんですよね、これは。それができていないで、今この制度ができてから、今からやります・・、それだと今まで行政は何をやってきたかという話になるかと思うんですね。その辺はいかかでしょうか。

○産業建設課長（高木和彦君）　今までは、その機能は農業委員会の方で持っていたわけですけれども、なかなか借り手も、例えば２反の田んぼをやっても生活できるほどの収入になりませんし、畑についてもありきたりのものを２反作ってもなかなか生活に結びつくことができないということで断念したような経過があると思います。

ただ、やはり農業のこれは宿命で、元々松崎町は非常に農業が盛んだったんですけれども、観光ブームが来たら観光に飛びついて、皆さん土地を荒らしてしまったという反省もあると思います。

今、新たにまた農業が、観光の伸びということが期待できない中で、もう一度地球全体の温暖化ですとか、いろいろなことを考えながら、農業というのをもう一度見直そうということで、こういう土地の集約化ですとか、荒廃地の再生ですとかをやっているわけですから、今後農業委員ですとか、さっきの新たにできた制度なんかを活用してやっていきます。

また、ご存じだと思いますけれども、いま松崎町の方では、農地を保有している方全員に対して、農地を管理しているか、アンケートがいっています。そこで、管理できない方の分については、農地の中間管理機構の方に農地の管理をお願いするような形で、県全体、町全

体で農地を保全しようということで力を入れてまいりますので、ご理解いただきたいと思います。

○２番（渡辺文彦君）　いま課長の言ったことは、私は、よく話はわかるんですね。ただ、問題は・・。

○議長（稲葉昭宏君）　休憩しますか、大丈夫ですか。

○２番（渡辺文彦君）　いいです、大丈夫です・・・。あの・・・何と言ったらいいかすみません。

○議長（稲葉昭宏君）　暫時休憩します。

（午後　２時０４分）

○議長（稲葉昭宏君）　休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後　２時０５分）

○２番（渡辺文彦君）　申し訳ございません。

今、その・・、何を作っても・・、何でもかんでも作ればいいというものではないということで、たまたまある方と話をしていて、おもしろい話を聞いたんですね。この夏ちょっと天気も良かったことがあって、農家の方は割とたくさんキュウリやナスが採れたんですね。それが市場にいっぱい・・、ＪＡのほのぼの売店、より道売店等に出てきて、結構物があふれていたと、僕に話をしてくれた方は、たまたま今年に限ってですけれども、大量に作ったんだそうです。その方が、ここに出荷してしまうと、全然小規模の趣味でやっているような方のこづかい稼ぎにならないと、その方は最終的に１本１円までいったというんですね、キュウリが。

こういう状況を考えると、やっぱり農業をただ何でもやればいいという話ではなくなるわけですね、やっぱり。計画性をもった営農を考えていかなければ、ただやっても収益にならない。その方は朝４時から10時くらいまで働いて、１日6000円、7000円だよという話をしていましたけれども、これでは意味がないわけですね。そうすると、効率的な農業でないといけないということは当然わかってくるわけですね。農業をやるにしても、高付加価値で収益の上がる農業でなければ・・、いま地方のビジネスというのは、低売上高収益がベースになると言われている方がやっぱり多くなっている。たくさん売って、たくさん儲けるというの

は、おそらく地方は向かないんじゃないかと、そうなると、そういう計画性をもたなければならないんだけれども、先ほど、最初の話に戻って、新規就農の方がそこまでのノウハウを持ち得るかどうか。

町は、総合戦略の中で５人の新規就農を目指して、２反の耕作放棄地の解消を目指しているわけですけれども、そこに対応できるんですかね。その辺を。

○産業建設課長（高木和彦君）　先ほどちょっと出ました農地利用最適化推進委員、こちらの方は、農業について明るいということもあるものですから、こちらの方の指導もあると思います。

また、町内では、新規就農した方をいろいろな形で支えるサポートの方もいますし、農協さんなんかもそういうことをやっていますので、技術的なことなんかについては、そちらの方で対応していただくことは的確かなと。少なくとも役場の職員の方で農業のこと、農薬について何もわかりませんので、そういう専門的なことは農協さんでやっていただきたいと思います。

もう一つ、これは私の持論というか、いま松崎町の農業をどういうふうにするかということで、もちろん桜の葉っぱというのはうまくやれば１反当り純利益が80万円以上出るということもあると言われていますので、いま松崎町が一番やるのは、桜の葉っぱがいいと思うんですけれども。もう一つの考え方として、必ずしも２反、３反、10ヘクタール、20ヘクタールの大規模農業をやるよりも、例えば各家の方が10坪でも20坪でも結構です。どこか１か所にきて、10坪のところに家庭菜園的なもので、今日行ったら、そこでキュウリを作った、隣の人がナスを作った、話をしながらとかして一銭の収入にもならなくても、そういうことで健康を維持することで、医療費を出さなくて済むとか、結局、農業で10万円稼ぐのも一つの収入ですけれども、医療費が10万円かからなければ、同じ効果がありますので、そんなことも松崎町なんかでは考えていいんじゃないかなと考えています。

○２番（渡辺文彦君）　町の農業において、何が一番効率的に利益を出せるかといったら、やっぱり課長のおっしゃるとおり、僕もやっぱり桜の葉っぱが一番いいのかなと思います。そういう中で、そういう桜葉生産組合みたいなものが立ち上がってきたというのは、非常に結構なんですけれども、ただ、やっぱりこういう組織ができているんだけれども、まだまだ総体的な生産が伸びていないというのが現状じゃないかなと私は捉えているわけです。その辺は何がネックだと思いますか。

○産業建設課長（高木和彦君）　桜葉振興会の加入者の方は、やはり非常に高齢ということがあります。なかなかそこで新たに畑を開こうとかということになりますと、できないというのが現状だと思います。

そういう点で、今回国の方の補助金なんかを使って、まずそういう意識がある方については、それ以上できるように後押しもしますし、できることでしたら、畑を広くしたいということがあれば、それもそんな制度を使いながらやっていければと思います。

また、農薬なんかについても今の散布している方が正しいかどうかは、これはよくやっぱり見分してみないと、人によっていろいろな違いがありますので、そこをきちんとすることで、今まで年に５回やっていたものが３回になれば、それだけ楽にもなりますし、肥料の方法についてもいろいろな効率的なものがいいとかということがあると思いますので、それはやはり私どもは農協さんなんかにも間に入ってもらいながら、研究して効率のいい農業になるように後押しをしていきたいと思いますので、お願いします。

○２番（渡辺文彦君）　今日いろいろ桜葉なんかに関していろいろの議員の方の発言があって、その中で、町長の答弁の中で、行政のできることと民間でやることを区別されているような発言があったと思うんですね。やっぱりそれは基本的だと思います。その中で、じゃあ、行政もできる仕事って、町がとりあえずできることって何かということを考えた時に、例えば、じゃあ、鳥獣被害の問題、町長は先ほど松崎で単独でやってほかに逃げて行けば意味がないから、広域でやらなきゃいけないよという話をされたと思います。これは、おそらく事実だと思うんです。その体制はこれからみんなで考えていきましょうと・・、そういう話でしょう、今の段階は。

それがやっぱり後手に回っているのかなと・・。それが、考えていきますよと・・、その結果が出てくる・・、すぐには出ないんですよ、５年後ですよ、10年後ですよ、そういう流れになっているのかなと思うんですけれど、その辺はどうなんですかね。

○町長（齋藤文彦君）　やっぱり私は、基幹産業は松崎は観光ですから、観光を中心に据えているわけですけれども、その下に第１次産業ということをよくいうわけですけれども、やっぱり棚田に関わっていて、本当に痛切に感じたわけですけれども、自分たちが子どもの頃は、棚田は全盛期だったわけですけれども、やっぱり観光でお金が入るようになって、農業をやってもお金にならないというやつがだんだんとなっていってみんな耕作放棄地等があふれてきたわけですけれども、ある人が、松崎の農業を見て、こういうことを言ったんですよ。小

規模かつ自家消費農家が大半で、大正時代の耕作整理、これは５畝ですけれども、以上の整備を望む声が松崎町にはなかったと。農業が・・、本当に農業をやっている人が本当に少なかったと、そして、それで耕作放棄地が増えていったと。それで、事業費を負担してまでの基盤整備をしたくない人がほとんどだったと。それと不在地主等も増加していったわけですけれども、やっぱり今は本当に車が入れて、ある程度自家消費農家から中心的な担い手も販売農家のように変えていかなければ、松崎の農業というのは、やっぱりいかないと思いますよ。やっぱり区画の大規模化をしなければ、これからの松崎の農業はいかないと思っています。

伊豆の国市の例なんかをみると、ほとんどがトマトが中心になるわけですけれども、篤農家と農協が組んで、これだけのお金でやってこいと、そうすれば、これだけの稼ぎをみさせてやるよというようなシステムができていて、農業をやる人もそれなりの気持ちをもって、お金をもってやってきて、本当に農業に取り組むわけですけれども、松崎に来て、本当に農業で食えるのかというと、非常に疑問があって非常に厳しいなと思っています。

私は、一つ希望があるわけですけれども、桜の葉っぱと桑の葉っぱが松崎では本当に今から一番稼げる農業だと思っているわけですけれども、このところ、あるところで花の生産者で有名な人が青パパイヤを松崎でやれば絶対成功するということで、青パパイヤを使った料理を食べたことがあるわけですけれども、それなりにおいしく、これは面白いなというようなことがありますので。そういうような本当のプロフェッショナルの人に入ってもらって、松崎の農業をいかに活性化するかということを進めていかないと、松崎の農業はなかなか元気にならないのかなと、答えになるかどうかわかりませんけれども、私はそう思うわけでございます。

○２番（渡辺文彦君）　僕が最初にお断りしたように、この農業にこだわるのは、ほかに産業があるかという視点があるからです。別にほかに食うビジネスがあればいいんですよ、ぼくは、皆さんが農業に関わらなくても。観光で食えるなら、観光で一生懸命やっていただければそれでいいんです。でも観光はどうですか。儲かっていますか、皆さん。そこですよ、問題は。だったら、ほかに・・、地域に人を増やしたいという方向性があるならば、ほかにどういう方法で人を増やすんですか。

農業で食えないからあきらめてじゃなくて、農業で食える方向性をやっぱり提示していかなければ、先がないような気がするんですけれども、町長、いかがですか。

○町長（齋藤文彦君）　若い人が農業に従事するにしても、これだったらたぶん生活できるだろうというやつを目にみせなければいかんと思っていますので。これが、本当に桜葉がそれなりに方向性が見えてくれば、若い衆が入ってくるのかなと思います。

それで、地域おこし協力隊を見ていますと、ただそういう農業じゃなくて、半農半Ｘで、ある程度自給自足の農業ができて、自分の好きなことをやるというようなこともあるわけですから、そのような人を増やすとか、両方で進んでいかなければいかんのかなと思っています。

ただ、先ほど言ったみたいに、松崎で農業で食えるといったら非常に厳しいと思いますので、本当に精査してやっていかないと難しいと思います。

○２番（渡辺文彦君）　先ほど町長が例に挙げられた農家の方はおそらく僕は推測できるんですけれども、その方は農業で食っておられますよね。ということは、やり方によっては、農業でも食えるということですよね。だから、そこなんですよ、問題は。どうやってこの農業を確立して、若い人なり、地元の方、よそからでも、地域の方でも担い手をうんでいくかという方向性を出すのが・・、そうしなければ、みんな耕作放棄地になってしまえば、美しい村入って・・、あそこも耕作放棄地、ここも耕作放棄地になって、美しい村の名前が泣きますよね。そうならないためにもやっぱり農業をある程度は維持されなきゃいけないはずなんです、やっぱり。

農業をやって金にならないでは参加する人がいないわけですから、参加してくる農業を確立しなければいけないんだけれど、それを民間で今までやってくださいよと行政はお願いしてきたわけです。民間の主体的な行動を支えてきたわけです。それが本来の経済システムの中であるべき姿だと思うんですけれども、それがだんだん崩れて、みんなやめて今の現状があるわけです。

ここで改めて行政がもう一回こういう問題に対してどういうふうに関わるかをやっぱり再検討する必要があるのかなと僕は思うわけですね。だから、あえてここで今日こういう議論をしているわけなんですけれども、だから、何も・・、民間にみんなやってもらえば何とかなるや、あとは言われたらこっちからそれを支援するよでは、おそらく方向性はこのまま出ていかないんじゃないかなと・・、そうなると、町長が期待している町の美しさというのは確立できないんじゃないと私は思うわけですね。その辺でもう少し行政のあり方を変更していただきたいなと思うわけです。

その中で、町長が・・、課長かな。鳥獣被害の問題に対して広域で面積を集積して広くやった方がいいというようなお話をされていたと思うんですけれども、僕もそう思います。個人で小さい面積を囲って10万円が限度では限界があります。同時にやっぱり高齢化していくもので、自分でその作業をするのは大変なので、やらないでやめてしまうという方も多いわけですね。

ですから、やっぱり広く面積を確保して、同時に捕獲を進めるというような体制づくりをしていかないと鳥獣被害対策というのは進まないんじゃないかなと・・。基本的には、農地最適化推進委員を大いに利用して農地の集積を図って、そこで何を作るか、それに対しての支援に対して・・、先ほど町長の言われた篤農家、その方が協力できるのかできないのか、ほかの方も協力してくれるのかどうか、その辺の協力体制はおそらく行政にやってもらった方が僕はいいと思うんですよ。その辺はいかがでしょうか。

○産業建設課長（高木和彦君）　ちょっとご質問の趣旨とずれるかもしれませんけれども、いま結構この鳥獣被害につきましては、国も本格的に取り組み始めています。まず、今日の農業新聞の方に鳥獣被害対策を国の８省庁で横の連絡をきちんとつくってやっていこうというのが決まりそうです。施行については12月になるということですけれども、これについては、どのような対策が出てくるか、これから注視していきたいと思います。

国の機関として、松崎にも伊豆森林管理署がありますけれども、ここがいま国が持っている山、特に池代なんですけれども、池代なんかもシカの被害がかなりあるということです。くくりワナというのを・・、僕はちょっとどんなものだかよく知らないんですけれども、55か所、それと囲いワナというものがあるんですけれども、それを15か所ほどやって、いろいろ実験的に取り組むという連絡をいただいています。その結果、例えば習性ですとか、どんなことがあったというデータをもらうことになっていますので、それを今後いかしていきたいと思います。

もう一つ、今まで通常の鳥獣被害につきましては、予防対策、捕獲対策。予防対策というのは網を張る、電気柵を張る。捕獲といいますと、猟友会の方に獲っていただくというこの２つが主でしたけれども、もう一つ、生息環境対策ということで、今なぜ里山にイノシシとかシカが下りてくるかということをもう一回考えてみたいと思います。というのは、荒れた畑ですとか、山の中腹にあるところで柿の木がありますよ。栗の木がありますよ。もうほとんど管理されていない。そういうところにイノシシが１回来てしまうとそこをえさ場にする

ということがあるそうです。また人家の近くでも柿ですとか栗、そういうものが何も手入れをされていないというのもありますので、やはりそういうのは実がなる前にどんどん切って埋めちゃうとか、そういうことをすることでイノシシが下りてくる確率ですとか・・。耕作放棄地がたくさんありますけれども、その中にイノシシがひそんでいるということもあるようです。やはりこの辺は地区全体でそういう環境を作らない。もし現れてもきちんとした柵を張る。またそれも個々に田んぼを巻くんじゃなくて全体に巻く。

イノシシの捕獲についても山の中に行ってイノシシを撃っても、山のイノシシと里に下りてくるイノシシはやはり若干違いますので、里に下りて来たものを効率的に捕獲する。その３つをうまく組み合わせた鳥獣対策を実施していきたいと思います。

○２番（渡辺文彦君）　次の問題がありますので、この辺で終わりたいんですけれども、一つだけ課長にもう１回確認したいんですけれども、例えば山の中腹に柿の木がある、栗の木がある、これが鳥獣被害の温床になっているということですが、誰が言っているんですかね。誰がそれを管理しているんですか。それをちょっとお尋ねします。

○産業建設課長（高木和彦君）　それはもちろんその土地の所有者です。ですから、そういうことで、地域全体で自分の持っている土地にそういうことがないようにいろいろみんなで協力する。私には関係ないからということではこれからは済まない問題だと思っています。

○２番（渡辺文彦君）　基本的には所有者なんでしょうけれども、所有者がだんだん不在になっている現状もあるということは当然課長も承知しているはずですから、この問題はおそらく個人に任せてもかなり解決は難しい。そういう意味では、集落全体とか、ある程度行政が主体になって動かないとこの問題は解決しないだろうと私は感じております。

とりあえず、ちょっとまだ結論も出ないんですけれども、次もありますので、時間がなくなりましたから、もう１個、２点目についてちょっとお伺いしたいと思います。

この10月にフェスティバルが行われるわけなんですけれども、僕だけなのか知らないんですけれども、町内を歩いていて、このフェスティバルが行われるという雰囲気づくりを感じないんですね。「どこの話」というのが正直な話なんですよね。

前に種が配られたけれど、どこかに咲いていますかね。皆さんの方で咲いていますか。それを考えると、おそらく咲いている所は少ないような気がするんですね。このフェスティバルは本当に町民で共有されたフェスティバルになっているのかな。

先ほど町長は、町民が参加するのは難しい、やっぱり「行政が・・」みたいな話だったと

思うんですけれども、行政がリードを取ってというような話だったと思うんですけれども。ただ行政でもいいんですよ、ただ問題は、この美しい村が何を目指しているかなんです、要は。地域の資源を活用して地域が元気になることを目指しているならば、地域の参加がなければ何の意味もないわけですよ。行政がいくらがんばって、フェスティバルだけ成功させても何も意味がない。

去年長八200年祭が行われて、それなりに動員もあったかもしれないけれど、今年の長八美術館の入込み、１月から６月までの入込みは増えましたか。どう説明しますか、これを。この辺をやっぱり考えなくちゃいけないんですよ。やればいいというものではないんですよ。やるならば結果を出さなければ・・。目的とした結果を出さなければ意味がない。ただやりました。それが終わったからもう終わりです。それでは何の意味もない。僕はそれが心配だから、３月の議会の時にもこのフェスティバルの状況に対して、どういうふうな状況にあるんですかと確認はしたはずです。去年も９月の時もやっぱり長八200年祭に対しての中間経過みたいなものを尋ねたわけです。それは、今年これがあるとわかっていたから、今年にいかしてもらうために事前に布石を打っていたわけです、僕としてみれば。

でも、それがなんか見えてこない。結果論として、長八に関してみれば、長八だけが減っているならば、僕は理解でき・・・、それでも理解しがたいんだけれども、町の観光施設的なもの全部が減少しているわけですね。唯一まつざき荘だけの宿泊増しかないわけです。これで本当に・・、去年やった事業、これが本当に成果を出していると言えるかと思って・・。

問題は、だから、いま言ったようにこのフェスティバルを契機にして町は何をしたいのか、町がなんかやるんじゃなくて、町民が参加しなければ意味がないわけでしょう。

町長、そうじゃないですか。町民が参加するきっかけがどこにありますか。この地域資源をいかして、これに参加する。その辺をちょっと・・、フェスティバルに関連でかまわないです。ちょっとその辺を・・。

○町長（齋藤文彦君）　私もイベントはいろいろやってきて痛切に感じているわけですけれども、本当に全体的にまとまってイベントが盛り上がるというのは非常になかなか厳しいわけで、周りだけは盛り上がっているけれども、ほかのところは非常に冷めているというようなことがずっとで、全部を盛り上げるようにするには非常に難しい、何をやっても難しいと痛切に感じています、自分はこの10年間やってきて。

それで、松崎町日本で最も美しい村推進委員会の名簿を見ると、これは松崎町の主だった

人たちが全部出ているわけですよね。そして、町がいろいろ説明するわけですけれども、本当に皆さん方が、もしその委員会だったら委員会の主だった人が出ているわけですから、なんかの時は、いま松崎はこうやっているから、「皆さん、協力してください」というようなことをもっと言ってくれないのかなと私は痛切にいつも感じています。みんな松崎、役場がやれ、役場がやれと言ったって、やれないわけですから、松崎町はこういうことを考えてやっているから、「じゃあ、おれたち委員会も参戦しようじゃ」と「おれたちはこういうことができるから、一緒に参加できないか」というようにこっちに投げかけるようにしてこないと、なかなか全部を盛り上げるようにするのは非常に・・、私はやってみて非常に難しいと思います。おれたちも努力が不足しているところはあると思うけれども、松崎町はこういうことを考えているんだから、じゃあ、もっと協力してやろうじゃと、おれたちはこういうことができるぞというのを・・、ガンガンきてくれるようになってもらわないとなかなかいろいろなイベントをやっても盛り上がらないなと痛切に感じています。

○２番（渡辺文彦君）　いま町長がおっしゃっているジレンマというのは、私もよく感じるところであります。なかなかみんなが・・、そういう意味でやっぱり共有されていないんですね。事業のそのものとか、その方向性が共有されていない。そこで自分の果たす役割がみえてこないというか、その辺がやっぱりネックなのかなといつも思うわけです。だからといって、そういう状況だから、「しょうがないね」ではやっぱりなんの・・、先が見えてこないわけですよね。

そこをどうやって埋めていくか、その作業ですね、問題は。この辺はやっぱり地道にやる必要があるのかなと思うわけです。町長の方向性だと、「やっています。あれもこれもやっています」と言うんでしょうけれども、それが、結果がおそらく出ていない、残念ながら。

だから、もっと結果が出るようにするにはどうしていくか、もっとまじめにというか・・、まじめに考えているでしょうけれども、もっともっと深く議論していただきたい。本当に町民に何を求めて、これをやってもらいたいということを提案してもいいと思うんです、僕は。

ここまで町が協力するから、これに対してなんとか地域で協力してもらいたいというような方向性を出してもいいんじゃないかと思うんですけれど、そういう方向性を感じないんですけれども、その辺はいかがですか。

○町長（齋藤文彦君）　本当に非常に難しい問題です。去年、松崎町役場の職員を「日本で最も美しい村」連合に全員視察に行けと言ったわけですけれども、これは私だけの考えで、ち

ょっとここで言うのもなんですけれども、本当に「日本で最も美しい村」連合の村というのは非常に面白いまちづくりをしているところがいっぱいあるわけですけれども、松崎の町民の皆さんにある程度募集して、この町に行くから参加してはどうだろうかというようなこともやっていかなければ、これは、松崎の皆さん方もなかなか盛り上がってこないのかなと思っています。なかなか遠いところがいっぱいありますから、難しいわけですけれども、有名なところだったら、皆さん上勝に行くんだったら、上勝だったら面白いから、葉っぱだから行ってみようじゃとかという感じが出てくると思うんですけれども、ある程度やっぱり自費を出してもらって松崎町も少し出して行くというようなことをしていかないとなかなか盛り上がらないのかなと思います。

今は本当に、昔は協会とかなんとかが本当に力を持っていたから、そこに集まっていれば旅行も何も一緒にできたんですけれども、本当に今はネットの社会で１人が都市国家みたいで、１人ずつが集まっているけれども、みんなでやるということがなかなかできなくなってきていますので、やっぱり松崎の人たちが旅行に行くというようなことを少しずつやっていかないとなかなか厳しいのかなと感じているところです。

○議長（稲葉昭宏君）　申し上げます。時間を延長しますか。

○２番（渡辺文彦君）　延長をお願いします。

○議長（稲葉昭宏君）　５分延長を許可します。

○２番（渡辺文彦君）　このあいだ依田邸の活性に対するワークショップに参加した時に、そこで講師になられた方が、フランスの美しい村のことを紹介してくれましたけれども、どこの町、どこの村に行っても参加している・・、これですよ。みんな自分の村を自慢して誇りにする。自慢するんだと、どこの町に行ってもそうなんだと・・、じゃあ、うちの町はそういうのがあるのかなと・・、うちの町はここが絶対いいところだから、これはぜひ見ていってくれとか、これは食べていってくれとか、町民が言えるものがどれだけあるのかなと・・、それがやっぱり、そういうものづくりからかなというのが、今の感じがしてはいるんですね。

確かに桜葉がこの目的の中では一番てっとり早い方向性を出せるのかもしれないんですけれども、なまこ壁とかに関して・・、依田邸の話はなまこ壁の今後ということで、関わってのワークショップだったもので、なまこ壁をみんな町民が共有するというのは、かなり厳しいのかなという印象は正直受けているわけです。そこで、依田邸に関して言えば、大沢の方が参加していなかったこともあるもので、本当にこれが町民全体でこの施設を盛り上げる、

大切に思っているという気運が高まっているのかなという疑問も感じざるを得ないわけですよね。そういう意味で、やっぱり地域の中にあるものをやっぱり少し、時間はかかるからある程度仕方ないんでしょうけれども、でもやっぱり努力は積み重ねないと難しいのかなという感じがします。

当然町長は、「そういう努力はしていますよ」と何度もおっしゃっているわけですけれども、まだまだその辺に工夫が必要なのかな。その辺は感じています。その辺で、町長、今度なんか10月だか11月にフランスに行かれるそうですね。行かないですか。そんな話をちらっと聞いたんですけれども、もしそうならば、本当にそういう村があるならば、そういう所に行った感想をまた聞かせていただきたいなと思ったんですけれど・・。本当に私たちがこの町を維持していくという自分たちの自覚がないとやっぱり行政だけががんばっても結構厳しいのかなと思うわけです。でも、その中で町長も自分の姿勢というのを出されているわけですけれども、それが共有されないと方向性をして定まっていかないもので、もっと具体的なところで、例えばフェスティバルならフェスティバルでいいですよ。その中で、ここの協力はぜひお願いしたいということでもっと広く町民に呼びかけてもらいたい。広報でボランティアをお願いしますと出ているけれども、どんかいボランティアは集まりましたか。その数字を把握していますか。

○企画観光課長（山本　公君）　ボランティアについては２名だったですかね、直接こちらに申し込んできていただいている方は。

いずれにしても、全てがそのフェスティバルそのもの、会議だとかに関われるわけではないですので、その中で、先ほど言いましたようにみんなで町をきれいにしましょうとか、あるいは温かくお出迎えしましょうよというような形の関わり方もあるわけですので、そういう形で関わっていただけるように、会議で話をしたりとか、区長会で話をしたりとか、あるいは広報を通じてこれまでもやってきているわけですけれども、なかなかそこがまだ浸透していないんじゃないかというようなお話がありますので、そのあたりはまたお願いしてまいりたいと思います。

○２番（渡辺文彦君）　時間もそろそろになってきましたので、まとめて終わりたいと思うんですけれども、農業の問題に関しても、この美しい村の問題に関しても基本的には町の存立ですよね。持続的な町をどうやって確保するかという視点に立って考えていかなければならない問題だと思っています。その視点をなくして、ただ一事業者が儲かればいいとか、そう

いう話ではないと思っているわけですよね。ただイベントをやって、それでちょっと一時だけ盛り上がればいいという話じゃなくて、町全体が今後どういう方向性に向かって・・、例えば、町長が目指している7000人の人口に維持するには何が必要なのか、具体的に噛み砕いて政策を打っていかないと、ただ7000人を何とかしたいです、それじゃあ無理です。

この間、牛原山に関わっている山崎さんとお話したんです。「イベントはもう地域活性化には全然役に立たないでしょう」とおっしゃっていました。僕もそう思います。イベントそのものは一時は盛り上がるかもしれないけれども、その後の反動の方がむしろ怖いんですよという言い方をされていましたね。おそらくそうだと思います、僕も。やっぱりイベントとか、そういうんじゃなくて、基本的にはその地元で若い人たちがここで働けるベースづくりすることがまず最優先課題。町の創生戦略の皆さんの意見の中、若い人の意見の中で、ここで働く場が欲しい。それが一番を占めているわけじゃないですか。それに対して行政がどういうふうに応えていくか、それが一番求められているんじゃないかなと思います。

その辺は私の言っていることが正しいかどうかはわからないですけれども、山崎さんはいろんなことをやって、そのうち一つでも引っかかれば、いい方向が出てくるんじゃないかとということを言っていました。とりあえず行動することが大切なのかなと思っています。そういう意味で、私たちのできることは協力します。行政でできることは行政の方でしっかり支援していただきたいと思います。

これにて私の一般質問を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○議長（稲葉昭宏君）　以上で渡辺文彦君の一般質問を終わります。

暫時休憩いたします。

（午後　２時３７分）